悪性腫瘍が疑われるときに受ける検査

日本臨床検査医会
神奈木　玲児

腫瘍マーカー検査

癌胎児性蛋白
α－フェト蛋白
CA19－9
等

- がんの検出・診断
- 治療効果の判定
- 再発の予知・検出

●腫瘍マーカー検査とは

悪性腫瘍が疑われる時に受ける検査に、「腫瘍マーカー検査」と呼ばれるものがあります。患者さんの血液を検査して、からだのどこかに癌があるかどうかを検査するものです。一回の簡単な採血で、広い範囲の癌についての情報を得ることが出来ます。

この検査では、癌でたくさん作られる分子が、血液の中にどのくらいあるかを調べます。そうした分子を腫瘍マーカー分子といっています。これが血中に存在するようだと、からだのどこかに癌がある可能性が高いわけです。

よく使われる腫瘍マーカーには、少々耳慣れない名前ですが、癌胎児性蛋白（CEA）、α－フェト蛋白、CA19－9などがあります。癌胎児性蛋白（CEA）は、大腸癌をはじめとする広い範囲の癌で作られることがわかっています。α－フェト蛋白はおもに肝癌で作られます。CA19－9は、膵癌をはじめとする消化器の癌の診断に役立ちます。このほかにも、検出したい癌の種類によって、多数の腫瘍マーカー検査があります。

●腫瘍マーカー検査の結果が出たら

腫瘍マーカー検査で陽性の結果が出ると、患者さんはもう自分が癌にかかったと思って目の前が真っ暗になってしまうかも知れません。でも決してあわてる必要はありません。気をおちつけて、主治医の指示に従って、ひきつづき透視・内視鏡検査・超音波やCTスキャンなどの検査を受けて下さい。

実は、これらの腫瘍マーカー分子は、癌でたくさん作られますが、癌でない正常の臓器でも、少々作られていることが多いのです。このため腫瘍マーカーが陽性の結果が出るのは、確かに統計的には癌の場合が多いのですが、癌でない病気（良性疾患）でも、ときどき陽性の結果になることがあるのです。これを「偽陽性」といっています。ですから、腫瘍マーカー検査の結果が陽性だった時には、さらに進んで、ほんとうにどこに癌があるのかを確かめる検査を受けなければ、はっきりしたことはわかりません。詳しく検査すると、癌がみつからず、かわりに偽陽性の原因になっている良性疾患がみつかって、ほっとすることもあるのです。ごくまれな場合ですが、腫瘍マーカーが陽性なのに、その後の検査で癌がどこにも見つからず、かといって偽陽性の原因になっている良性疾患もみつからず、なぜ腫瘍マーカーだけが陽性なのか、迷宮入りになってしまうこともあります。患者さんにとっては、何日もかけていろいろな検査をしたあげく、「わからない」という結果になってしまうわけで、たいへん迷惑な話ですが、こういう場合には、しばらく期間をあけて、定期的に検査をしてゆくことになります。

逆に腫瘍マーカーが陰性だった場合には、これで自分は絶対に癌でない、と考えてはいけません。癌の中には、たまたま腫瘍マーカー分子をあまり作らなかったりするものもありますし、早期の小さな癌だと、量が少なく検出できないこともあります。悪性腫瘍が疑われる症状が続くようなら、ひきつづきほかの検査も受けてみる必要があります。

癌の存在がわかって、手術や化学療法、放射線療法を受ける場合も、定期的に腫瘍マーカー検査が行われます。この検査は治療法の効き目を判定する上でも役立ちますし、万一の再発の予知のためにも役立ちます。